

News Letter



■2010年12月13日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

2010年度 三重大学全学FDの報告 「英語で授業する」

はじめに

2010年11月26日（金）の16:30から18:00まで、三重大学全学FD「英語で授業する」を開催しました。国際交流センターが主催し、高等教育創造開発センターが後援となりました。参加者は、あらかじめ申し込んでいた23名に加えて、当日参加者が21名あり、30席しかない国際交流センター（CIER）の演習室に補助椅子を運んで急場を凌ぎました。

本学では、「留学生30万人計画」にどのように対応するのかについて明確な方針を持つに至っておらず、留学生の受け入れや派遣に関するガイドラインも判然としません。そうした中で、国際交流センターでは、「英語による国際教育科目」を共通教育の統合科目として開講していますが、各学部・研究科における専門科目の英語での開講、また将来的に英語のみで学位を取得できるコースを設置するかどうかなど、教育の国際化をめぐる課題の検討が急がれる今日この頃です。

英語で教えることに関するFDも本学では初めてのことです。今回は、名古屋大学高等教育研究センターの中井俊樹准教授に講師を依頼し、名古屋大学において英語による授業のノウハウ等をまとめた経験に基づいて、英語で教える際のヒントや必要な組織的サポートについて考えるきっかけを提供していただきました。以下に講演の要点をまとめます。

海外の動向と日本の政策

英語を主言語としないヨーロッパ27カ国では、英語のみで学位が取れるコースが2002年から2007年にかけて3倍に増加。それらのプログラムに在籍する学生の65%が留学生であり、韓国でも、ソウル大学が英語による授業を全授業の20%まで増やすことを目標としており、高麗大学ではすでに英語による授業が50%を超えているといった状況もあります。その中で、日本は、「留学生30万人計画」を国家戦略として打ち出し、大学全体で3割の英語授業を目指しています。そのための国際化拠点整備事業（グローバル30*）には現在13大学（国立7大学、私立6大学）が採択されています。



大学の2つのモデル

1) コスモポリタン大学モデル

中世ヨーロッパに発祥、知的普遍主義（学問に国境なし）を標榜し、共通語としてラテン語を使用。共通カリキュラム。必然的に国際性をもつ。

2) 国民国家大学モデル

近代社会において、国民教育（国家政策、国民統合）のために普及。国語を用い、多様なカリキュラムを発展させる。国家のための大学をいかに国際化するか。

『大学教員のための教室英語表現300』

グローバル13に採択された名古屋大学では、学内教員からの要請に応じて、英語による授業のノウハウとフレーズを収集・整理。手軽なハンドブックとして出版。そこで打ち出した基本方針は、次のとおりです。

- 1) 完璧な英語を目指さない（英語を母語とする人より非母語とする人の方が多い！）
- 2) コースの全体像をしっかりと設計する（シラバスをしっかりと作る！）
- 3) コミュニケーションの手段を増やす（笑顔、アイコンタクト、配布物、パワーポイント等！）
- 4) 授業への学生の参加を促す（自己紹介、ペア学習、ディスカッション等！）
- 5) 学生の多様な英語力に配慮する（レポートは日本でもOK? 不安を感じている学生への対応、ネイティブの学生にとっても貴重な学習機会！）

* 国際化拠点整備事業（グローバル30）

<http://www.jsps.go.jp/j-kokusaika/index.html>（参照 2010.12.08.）

次いで、初回の授業ですべきこと（5場面）、日々の授業の組み立て方（8場面）、学生の積極的な参加の促進（8場面）、さまざまな場面への対応（9場面）について具体的に展開。その他、経験に基づくちょっとしたコラムや、シラバスの書き方なども収録。なお、本書には学生向けの姉妹編『大学生のための教室英語表現300』（アルク、2009）もあります。

さらに名古屋大学では…

『英語による授業実践DVD』を2008年3月に作成。学内貸出サービスを行っている。各先生方が実際に英語で授業をやっている様子をビデオ撮影、これから英語で授業する教員にとって大いに参考になっている。

また、高等教育研究センターでは、教員向けワークショップも実践。ただし、教員が自発的に4時間のワークショップに参加したい、という率は約1%、資料がほしい教員は20%であった。その他に、今夏には、『専門を英語で教える』と題して、他大学から講師を複数招き、それぞれの専門分野での実践を紹介してもらっている。

結論

- 1) 英語による授業に困っている教員は少なくない
- 2) FDは一定の効果をあげることができる
- 3) 教員ニーズに対応したFDの提供が必要
- 4) 全教員対象でなく、各分野に分散したFD
- 5) 個々の教員に対するサポートも必要
- 6) 前提となる全学的な議論も必要：
コスモポリタン大学を目指す？
日本の大学で日本人教員が英語で教える意義は？

講演の後、質疑応答行われ、短時間に矢継ぎ早の質問が出て懇親会へと引き継がれました。また、参加者の皆さんにアンケートに答えていただきました。英語で授業をするための初めてのFDとして多くの参加者から高い評価をいただきました。また、これから三重大学として検討しなければならないことや次の段階のFDのあり方等についても建設的なご意見をいただきました。質疑応答及びアンケート回答の要点は次のとおりです。

- 国際会議などで日本人学生は他のアジアの学生に比べ、英語力等において見劣りする（1億の人口を抱え翻訳文化が確立している、国内だけで研究してノーベル賞も取れることが裏目に出ている）
- FDをネイティブがやって分析評価するのは？（ニーズはあるがまだそれができる教員がいない）
- 専門分野によって参加型授業とそうでないものと向き不向きがあるのでは？（それぞれ特性を生かした授業デザインが必要）

- ネイティブ、ノンネイティブといるいろいろな学生がいる中で、学生の言うことが聞き取れない（学生の言うことが聞き取れないという話はよくある）
- 日本語より英語で授業すると学生の理解度が明らかに下がる（質が下がる、という議論。質とは何か、英語で教えることでキャリアが広がるということもあるのでは）
- 英語で授業することのメリットやデメリットを十分に検討し明確なビジョンを持つべき
- 日本人相手に日本の大学で英語で教える理由を明らかにする
- アジアからの留学生たちの意見も訊くべき
- 「英語で教える」ワークショップをやりたい
- 教員の英語skillが向上するプログラムを考えてほしい
- ネイティブが相談に乗ってくれるといい

国際交流センターとしては、FDの参加者の貴重なご質問やご意見を活かし、高等教育創造開発センター（HEDC）や共通教育センターとの連携に基づいて、次の企画を開発したいと考えます。なお、今回のFDについては、HEDCの後援をいただき、特に長澤多代准教授にはFDのノウハウについて細部に渡ってアドバイスをいただきました。ここに深謝します。

国際交流センターがコーディネートしている「英語による国際教育科目」は共通教育統合科目「主題H」に掲載されています。「共通教育履修案内」または、「国際交流センター授業案内」をご覧ください。また、センターのホームページからもご覧になれます。

（国際交流センター 花見楨子）



中井俊樹編
『大学教員のための教室英語表現300』アルク、2008、94p. (CD付き) [附属図書館 377.15/E37]



中井俊樹編
『大学教員のための教室英語表現300』アルク、2009、90p. (CD付き) [附属図書館 377.15/E37]

三重大学国際交流センター
「英語による国際教育科目」
<http://www.cie.mie-u.ac.jp/class/international-education/> (参照 2010.12.08.)